# 本当の夜をさがして

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

ポール・ボガード　著，上原直子　訳

白揚社　本体2,600円＋税　四六判　416頁

天文観測をするためには，透明度，暗さ，シーイングの三つの条件が必要であるが，東日本大震災を契機にして，星空，そして「光害（ひかりがい，こうがい）」への関心が再び高まってきた．

「光害」が問題にされはじめて，4, 50年になる．当時は，高度成長時代で，そんなことを提唱しても「負け戦」とも言われた．実際そのとおり，長年にわたって「光害」は，ほとんど関心が払われなく，賑やかな明るい街が，私たちに星空を忘れさせてしまった．

本書は，その「負け戦」を世界各地で戦い続けている人々の活動を紹介し，「省エネ」「環境保護」などとともに，関心が高まってきた「星空」「暗い夜空」の素晴らしさとその保護の必要性を教えてくれる．

世界各地で天の川や夏の大三角，流れ星が見られる夜空を取り戻しつつある．石垣島天文台も島のみなさんの協力で周辺が暗くなり，天の川が流れる夜空が甦り，観光客からは「今回の旅で一番良かった」という声が上る．

イタリアで25年もこの活動に取り組んできた高校の理科教師ファルチさんは，星空を見上げることは「心を開いて大きな視野をもつために必要なもの」という．天文学的な興味や星空を愛することだけでなく，星空のもとでの心地よさ，癒される気持ちが，暗い夜空への関心を高めている．

自宅の水道の水が出っぱなしであれば，誰もが蛇口を締めるが，夜空に放たれっぱなしの照明の光には関心がない．野外の照明は税金で払われているので，その莫大な無駄に気づいていない．ヨーロッパで17億ユーロ，アメリカで22億ドルになるという．

星空を見る「権利」についても触れている．ユネスコでは，光害のない夜空について「あらゆる環境的，社会的および文化的権利と同等に，人類の奪うことのできない権利」と宣言している．2007年にカナリア諸島で開催された国際会議でも「星を見る権利を守る宣言」がされたことを教えてくれる．

「暗い夜空」を失うことは，生態系にも大きな影響を与えている．絶滅危惧種の減少だけではない．人間の健康もそうだが，文化を失うことにもなると警告している．

本書の章立ては，前後逆で9章から始まっている．「光害」問題よりも「星空保護」に関心があれば，後ろの1章からが良い．

石垣島でもVERA観測局や石垣島天文台が建設されたのをきっかけにして，星空保護の機運が高まっている．珊瑚礁の海だけでなく，島の星空が，地域振興や観光資源として注目されているからだ．国立天文台が提唱して始まった街の明かりを消して天の川を観ようという企画「伝統的七夕」も「南の島の星まつり」として15年続いている．

本書の付録部分でIDA（国際ダークスカイ協会）東京支部の越智信彰氏（東洋大）も紹介しているが，アジアの中で，韓国に次いで，日本初のダークスカイプレイスの指定も受けようと地域をあげて取り組まれている．

国内でも，星空やその保護への関心が高まりつつあるが，これにかかわる方々には，本書の一読をお薦めしたい．

宮地竹史（国立天文台石垣島天文台）